

LINE トークデータにおける言い切り形の使用場面について

甲斐さくら(福岡女子大学大学院生)

1. はじめに

対面会話・携帯メール・LINE の終助詞の出現傾向を分析した落合(2022)によれば、対面会話・携帯メールでは全体の4割～5割弱に終助詞の付加がみられた一方、LINE では4割に満たない37.5%で、言い切り形が62.5%と過半数を占めていた。落合は、LINE に多かった「やばい」などの一語文で言い切り形はよく用いられており、そのような一語文の多さと終助詞全体の出現の少なさから、LINE のやり取りが音声発話までではないものの素早いものであると述べている。しかし、本データでは、後述する例文(1)～(6)のように一語文ではない言い切り形も多く、素早いとは言いがたいやり取りがあった。また、相手からの応答や会話のテンポにおいて最も素早いやり取りとも言える対面会話では、発話末に言いさし表現や終助詞等が用いられる場合が多く、付加要素を何も伴わない言い切り形は少ないとされている(上原・福島, 2004; 甲田, 2016)。このことから、言い切り形の増加には、LINE のメディア・モードの特性以外の要因も考えられる。そのため、LINE における言い切り形の使用場面をみる際には、実際に行われたやり取りの内容に着目し、言い切り形と他の文末表現の関連や話し手の言語表現そのものをメディア・モードの特性と合わせて分析する必要がある。

日常のコミュニケーションにおいて、例えば、終助詞には、自分の方が多く情報を有する時、相手との認識の違いを示す時には「よ」、相手に深く関わる事柄など相手の方が詳しい情報を持つ時、両者の認識が一致しており相手への同意や共感を示す時には「ね」が選択されるなど、話し手が伝えたいある事柄と自分もしくは相手との関係性を表明する役割を担うものもある(大曾, 1986; 神尾, 1990; 益岡, 1991; メイナード, 1993 等)。また、言い切り形は、先述の上原・福島や甲田の研究が示すように、ある事柄を単に伝達するだけで事足りる場合や、聞き手めあて性を極力減らしその発話の宛先を指定していないかのような場合に使用されるなど、しばしば聞き手めあて性との関連が指摘されている。これらは、機能や表現効果に違いはあれど、どちらも「相手の存在」を重視している。そのような相手への配慮は話し手の文末表現の選択に影響を及ぼすのだが、それはたとえLINE であっても相手との対話である限り変わらないだろう。

では、何故LINE では言い切り形がよく用いられるのか。その使用には、話し手の文末表現の選択に影響を与え、また、対面会話とLINE の最も大きな違いの1つである「相手との関わり方」が関係しているのではないのか。LINE のように相手が目の前にいない中、ある事柄について話し手が相手の存在を考慮して伝達する時、その「話し手の言語表現」や「コミュニケーションの形態」に対面会話と異なる側面があり、その一端が言い切り形の使用として表出しているのではないだろうか。

2. 本研究の概要とデータ

2.1 研究課題

本研究では、LINE において特徴的だった言い切り形の使用場面について、落合(2022)ではあまり取り上げられていない実際のLINE トークデータにおけるやり取りに着目し、分析を行う。そして、先述の神尾(1990)やメイナード(1993)らが述べている、ある事柄と話し手または相手の心理的距離の遠近や情報の相対的所有度、両者の認識の共有といった「話し手もしくは相手との関係性」にもとづいて文で示されている事柄を整理し、LINE にはどのようなやり取りがあり、話し手はどのような場合に言い切り形を選択しているのか、LINE における話し手の文末表現を明らかにしたい。最後に、その結果をもとに、話し手の「相手との関わり方」や「言語表現」には先行研究と比較してどのような違いがあるのか、LINE におけるコミュニケーションの形態の特徴について考察を試みる。

2.2 言い切り形の範囲

「言い切り形」は、甲田(2016)の「動詞、形容詞、形容動詞の終止形で終わっているもの、これらに過去や否定、丁寧、アスペクト等の働きを持つ助動詞、補助動詞が付加したもの」とする。また、本稿では、データにみられた「窓口一緒だ〜[絵文字]」等の名詞述語文も含む。ノダ文(ンダ文)は先行研究と同様に含めない。

2.3 データの詳細

本研究で使用する LINE トークデータは、2023 年 9 月～12 月にかけて筆者が収集した 10 代後半～30 代後半の親しい者同士一対一のやり取りである。データ提供者に LINE トーク画面のスクリーンショットの提出を依頼し、各やり取りが行われた年月日、メッセージの送信時刻、提供者およびそのトーク相手(以下、協力者)の年代と職業、協力者との関係を合わせて回答してもらった後、宮寄(2018)を参考に xlsx 形式でまとめた。今回は、文に出現した言い切り形の分析を行うため、テキストメッセージのみを対象とし、スタンプなどは全て除外する。例文をデータから抜粋して提示する際には、テキスト内で使用された絵文字や顔文字は[絵文字]あるいは[顔文字]と表記し、個人情報にあたる箇所は必要に応じて伏字とする。本データには、例①と②のように、同一行内に文が複数存在したり、1 文が分断されて送信されたものもあったが、適宜記号や絵文字などで文を区切ってセルを分けたり、いくつかの単語を同一セル内に入力した。本研究では、そのように 1 つのセルに収められたデータを「文」という単位で扱う。

例① 同一行内に文が複数存在する場合

「(試験)もあるもんね…早くゆっくりしたいねえ[絵文字]」

→「(試験)もあるもんね…」 / 「早くゆっくりしたいねえ[絵文字]」(合計 2 文)

例② 1 文が分断されて送信された場合(下記の例文は原文ママ)

「いそがんでいいい」「よ」→「いそがんでいいいよ」(合計 1 文)

そして、データから、挨拶などの定型表現や相づち、疑問文を除いた、2088 文を主な研究対象とする。なお、「何なんだろうねあの自信って[絵文字]」のような倒置文は、通常の語順に直した際の末尾(下線部)を文末とした。研究対象の文末表現をみると、言い切り形 1133 文(54%)、終助詞が付加された文 665 文(32%)、終助詞以外の助詞等が付加された文や文末に付加要素を伴わないその他の文(言いさし表現やノダ文を含む)290 文(14%)で、本データでも言い切り形が最も多かった。

3. 研究方法

今回は、「文で示された事柄と話し手もしくは相手との関係性」にもとづいた分類を行い、言い切り形の使用場面を分析する。上原・福島(2004)や甲田(2016)の言い切り形の先行研究ではその出現箇所のみが分析対象となっているのだが、実際の文末表現の使用とは話し手の想定や判断の影響を受けており、言い切り形の使用場面は他の文末表現が選択されていた可能性をはらんでいる場合もある。滝浦(2008)で、話し手が「郵便局に行くこと」を相手に伝える際「ちょっと郵便局に行ってくる{ね/よ/φ(言い切り形)}」と、どれを使っても良い場合があると指摘されているように、現実の対話場面において、ある事柄と自分または相手がどのような関係にあり、最終的にどの文末表現を用いるかは、話し手の主観的な判断による部分が大きいと思われる。そのため、言い切り形の出現箇所のみを取り上げて分析するだけではなく、全ての文末表現を調べる中で、どのような場合に話し手が“そのまま言い切り形で述べる”という判断を行っているのか、話し手による文末表現の選択における傾向をみるのが重要と考える。

したがって、本稿では、一旦様々な文末表現を含む全ての文を整理し、その後、どのような場合に話し手が言い切り形を選ぶことが多いのかを考察する。まず、研究対象 2088 文を「文で示されている事柄と話し手もしくは相手との関係性」によって次の 3 つに分類する。その結果をもとに各場合の言い切り形 1133 文の割合や場面を分析し、話し手による言い切り形の使用について考える。なお、言い切り形の例文(1)～(6)は、それぞれの説明の次に示す。

① 「話し手自身に関する言及」

② 「話し手による相手のことへの言及」

③ 「双方が経験した共有事項への言及」

①は、話し手自身の考えや気持ち、予定、直接経験した出来事など、自分自身の心情や状況について述べたものを指す。また、話し手の持ち物や、話し手の知っていること、家族や職場の同僚といった話し手に近い人物および彼らに関する事柄などの話し手が有する情報について述べているものも含む。

(1)(自身の休日について)「土曜に行事とかあったらやすみー」

(2)(待ち合わせしている相手に対して)「大学着いたら連絡する！」

②は、例えば、演奏会に参加した相手への労いや感想など、相手の考えや思い、相手が直接経験したこと、これから経験するであろう予定、相手に近い人物および彼らに関する事柄など、話し手が相手に関することに言及したものを指す。

(3) (複数の試験を控えている相手に対して)「立て続けにくるやつだ、」

(4) (相手の所属するコースについて)「〈コース名〉の口頭試問考えただけで怖い、、、」

③は、双方がすでに経験し2人の間で明らかに共有されていると考えられる出来事や、トーク画面上に提示され文脈上共有されている情報への言及を指す。例えば、両者が見ている同じドラマについてお互いに感想を述べているもの、2人で出かけた日の回想、トーク上に共有された写真への言及などが該当する。また、話し手と相手に共通する知人への言及もここに分ける。しかし、会社の同期と業務について話すような「共通の話題」への言及は両者が同程度の経験を経ておらず、そのような事柄についてLINEでは共有事項かどうかの判定が困難であったため、③には含めず、適宜①か②に分類する。

(5) (お互いが見ているドラマについて)「福山雅治の視線もピントも合わない目の演技もよい」

(6) (2人で出かけた日の出来事について)「(地名)で一緒に食べてよかった～」

4. 分析結果

先述の3つの項目にしたがい、研究対象である2088文を分類すると、表1の結果が得られた。なお、表の割合は、各項目における研究対象2088文中の言い切り形またはその他の文末表現の割合である。

表1 文で示された事柄と話し手もしくは相手との関係性による分類の結果

	言い切り形	その他	合計
①話し手自身に関する言及	828 (57%)	631 (43%)	1459 (100%)
②話し手による相手のことへの言及	67 (33%)	138 (67%)	205 (100%)
③双方が経験した共有事項への言及	238 (56%)	186 (44%)	424 (100%)
合計	1133 (54%)	955 (46%)	2088 (100%)

言い切り形とその他の文末表現では、どちらも①が最も多く、研究対象2088文をみても同様の結果であるため、LINEトークデータは全体的に①のような発話が多いことがうかがえる。だが、各項目における文末表現をみると、①や③では言い切り形がよく用いられている一方、②では67文とかなり低い値となっており、その他の文末表現の方が使用されていた。そこで、項目ごとに2088文中の言い切り形の割合をみると、①57%、②33%、③56%となり、①「話し手自身に関する言及」と③「双方が経験した共有事項への言及」では56～57%と同程度の頻度で言い切り形が使用されていたのだが、②「話し手による相手のことへの言及」では33%にとどまり、①・③と比べて差がみられた。同じようにその他の文末表現についてみると、①や③はそれぞれ43%、44%であったのに対し、②は67%と多かった。②では、終助詞付きの文が99文と最も多く、研究対象全体における②の中では99文/205文(48%)と半数近くを占めていた。しかし、①・③では、そのような終助詞付きの文は、①426文/1459文の29%、③140文/424文の33%と3割前後で、②と比較するとやや少ない。

このことから、LINEにおける話し手の言い切り形の使用について、次のような傾向が示唆される。LINEでは①のように自分自身に関することについて述べる場合が最も多く、その際に特に言い切り形が使用されていると考えられる。また、③は共有事柄への言及であるため、①のようにその事柄に対する自分の気持ちを綴るだけでなく、その事柄を思い出しながら相手に何らかの確認をしたり当時を回想して感想を伝えたりすることも可能であり、相手への同意や共感を示す「ね」などを使って、そのような心情を表す後者の例が多くなってもおかしくはない。しかし、本研究のデータをみても①と③における言い切り形の割合に違いがないことを鑑みると、少なくとも、今回の③における話し手の発話は、①に近い性質を持っているのだろう。①と③では、話し手が自身の意見や心情を端的に述べる場合が多く、そのような場合には、文末が言い切り形になっても問題ない、あるいは、事足りているため、言い切り形が選択されているのではないだろうか。一方、②のように話し手が相手に関する事柄について述べる際には、話し手が一方的に断言するような表現を使うことは少ないと思われるが、言い切り形を用いると断定的な印象を与えかねず、やや使いにくさが残るため、①や③よりも選択されにくくなる。また、落合(2022)は、終助詞「よね」の減少がみられたLINEや携帯メールでは「確認/確認要求」という行為がしづらいことを指摘しているが、②の場面では、たとえ相手が目の前にいなくとも、終助詞を用いて相手に働きかけたり、同意や共感といった態度を比較的示しやすく、そのような終助詞の使いにくさも薄れると考えられる。これらの理由から、②のような発話では終助詞の付加に伴って、断定的な表現効果を有する言い切り形が選択されにくくなり、その使用が3割程度にとどまっているのではないかと。

5. おわりに

本稿では、LINE トークデータ 2088 文のやり取りに着目して、「文で示された事柄と話し手もしくは相手との関係性」にもとづき、言い切り形の使用場面を分析した。その結果、LINE では全ての場面で一概に言い切り形が増加したのではなく、特に①話し手自身に関することや③双方の共有事項への言及のような場面で話し手が自身の意見や心情などを端的に述べる場合によく用いられていた。しかし、②相手のことへの言及では、言い切り形の表現効果や終助詞の付加によってあまり選択されていなかった。このように話し手の文末表現の選択は場合ごとに違いがあること、そして、例文(1)～(6)のような語文ではない言い切り形が多かったことをふまえると、言い切り形の増加には、やり取りの素早さという LINE のメディア・モードの特性だけではなく、そのメディアを使用する話し手の言語表現やコミュニケーションの形態にも要因があると推測される。

ここでは、最後に LINE における話し手の言語表現について、その他の文末表現も取り上げながら考えてみたい。本データの文末表現で言い切り形の次に多かったのが終助詞なのだが、665 文中 537 文(81%)は、本稿の言い切り形の定義である“名詞述語文もしくは用言の終止形およびそれに助動詞や補助動詞が付加されたもの”への付加だった。つまり、研究対象の 2088 文において、その 537 文と言い切り形 1133 文を合わせた 1670 文(80%)は、最後まで言い切った発話であると言える。一方、先述の言い切り形の定義に当てはまらないその他の形式の発話は 418 文(20%)とかなり少なかった。したがって、LINE では、対面会話でよくみられるとされる言いさし表現もあまり用いられておらず、話し手は発話を最後まで言い切る場合が多いと考えられる。相手が目の前におらず返事もいつになるかわからない LINE では、基本的に文字だけを利用して、話し手は自分の意図が過不足なく正確に伝わるようにメッセージを送ったり、不足している情報を相手に尋ねて答えてもらったりしなければならない。話し手は対面会話の時よりも相手への正確な伝達に配慮する必要がある、そのような LINE の状況が、最後まで言い切った発話の多さに現れているのだろう。これをふまえて、各場合について考察すると、②のように相手に関わる事柄であれば、話し手にはある事柄の伝達に加えて、相手への同意や共感などの態度を示すことが求められるため、言い切り形のような断定的な表現よりも終助詞が利用されやすい。また、最後まで言い切った発話が全体のおよそ 8 割を占める中で、②に加えて、①や③でも終助詞の付加が 3 割前後みられるように、終助詞の表現効果の付与が必要とされる場合にもその使用は可能となる。一方、①や③のような場面で自身の意見や心情を述べる際には、②の場合と比べればそのような付与の必要性は少なく、言い切り形の使いにくさも薄れるため、相手に自分の気持ちなどを正確に伝達するという目的を果たすには言い切り形でも事足りるのだろう。さらに、落合(2022)が終助詞「よね」を分析する中で述べるように、打ち言葉と話し言葉では「時間共有のあり方」が異なり、前者の場合、話し手は相手から即座に反応が来るかわからず、その対応の見込みが立てにくいいため、認識の確認を基調とするやり取りが相対的に行いづらい。このような相手に働きかけがしづらい LINE の特異な状況も相まって、①や③の場合において話し手自身の意見や心情を正確に伝達することで事足りる場合には、言い切り形が選択されやすくなっているのではないかと。このように LINE における話し手の言語表現とは、メディアを使用する人々のコミュニケーションの形態がもつ特徴を反映していると考えられる。

今後は、LINE に出現した終助詞などその他の文末表現の使用場面や、やり取りの構造や文脈状況にも焦点を当て、本稿の結果と合わせて分析し、LINE または打ち言葉における話し手の言語表現について考察を重ねたい。

参考文献

- 上原聡・福島悦子(2004)。「自然談話における「裸の文末形式」の機能と用法」, 国際交流基金 世界の日本語教育 日本語教育論集 14, 109-123.
- 大曾美恵子(1986)。「誤用分析 1 「今日(けふ)はいい天気ですね。」—「はい、そうです。」」, 日本語学 5(9), 91-94.
- 落合哉人(2022)。「メディア・モードの機能は言語使用をどのように変えるか?—携帯メール・LINE チャット・対面会話における終助詞の使用と不使用を例に—」, 筑波日本語研究 26, 1-19.
- 神尾昭雄(1990)。「「ね」の性質」, 情報のなわ張り理論, pp. 60-78, 大修館書店.
- 甲田直美(2016)。「言い切り形が生じる文脈環境」, 東北大学文学研究科研究年報 65, 91-115.
- 滝浦真人(2008)。「終助詞「か／よ／ね」の意味とポライトネス—話者が直観的にしていることの長い説明—」『ポライトネス入門』, pp. 123-157, 研究社.
- 益岡隆志(1991)。「終助詞「ね」と「よ」の機能」, モダリティの文法, pp. 92-107, くろしお出版.
- 宮寄由美(2018)。「LINE データベースの設計と属性情報付与の現状について」, 国立国語研究所 言語資源活用ワークショップ発表論文集 3, 176-184.
- メイナード・K・泉子(1993)。「会話のことば」, 会話分析, pp. 90-126, くろしお出版.